

放射線科の現状と今後の取り組み

放射線科技師長 堀 勇 二

様々な分野においてデジタル化が押し進められているが、医療分野取り分け放射線装置、画像機器では急速な勢いでデジタル化が図られてきている。特に画像では情報量が多いためにデジタル化が遅れていたが、開発が進められることによって導入施設が大幅に増えてきた。当院でもFCR装置の導入に向けて病院長はじめ関係部局に理解を求めてきていたが平成10年度事業で正式に決定されたことにより、一般撮影系は4月より全面的に稼働出来るようになった。

我々技師サイドでのメリットも大きいですが、デジタル加算料などの収益的な面でも又安定した画像が提供できることにより各診療科でのメリットも相当に大きいものと考えられる。4月からの診療報酬の切り下げにより、CT、MRIでの影響を心配していたが一般撮影系の件数が前年比2.6%増となった事により、全体的な画像診断料も前年比0.9%増でなんとかカバーできているようである。11年4月よりは一般病床が40床増えることでもあり、検査内容の充実と件数の増加により増収を図っていききたい。

また長年使用してきたX-TV装置（日立メディコ、昭和60年10月導入）が使用不能となり10月20日急遽更新導入となった。この装置での選定にあたっては種々検討の結果、デジタル対応のC-ビジョンX-TV装置（島津メディカル）と決定された。その他平成2年6月に導入されたX-TV装置（東芝）が10年目に入り撮像管等の光学系が相当疲労をきたしている。透視下での内視鏡検査、エコー下穿刺検査など穿刺針、カテーテル、ガイドワイヤーなどを使用した透視画像が見えづらくなって検査に支障をきたしている為、光学系の全面的な交換が必要であり11年度内に実施していききたいと考えている。

11年度では地方センター病院の指定と共に透

析室の増床、2階病棟の新設で外科系病棟の分散と病床数の増加、特に胸部心臓血管外科を筆頭に脳外科、外科、泌尿器科の大幅な充実が図られる。このことにより放射線部門も大きな関わりが予想され検査件数の増加に対応でき得る努力と、より良い画像が提供できるよう研鑽を積む必要がある。

また、11年度事業では新に高速らせんCT装置の導入を予定している。現状のコンベンショナルCTには無い機能を有しておりより診断能の高い画像が提供できることになる。

大きな特徴として

- 1) 短時間で広範囲を検査できる。
- 2) データーが連続的に収集でき種々の画像再構成が容易に行える。
- 3) 血管造影法や術前のシュミレーションなどの3次元表示、胸部癌検診、動画像表示などが行える。

この高速らせんCT装置の導入により今まで出来なかった画像診断が行えるようになり確定診断に向けてより大きな力を発揮できるものと確信される。

またMRI装置もCT装置と同じように画像のクオリティーを一新させるべき高磁場装置とアプリケーションが大幅に充実されてきている。現状では脳外科、整形外科領域の検査が主であるが、0.5T（テスラ）と磁場が低い為に検査時間も長く、又限られた範囲での検査しかできず1日当り10名程である。しかし1.5Tの超電動装置では脳、胸部、腹部、骨盤腔領域の3D-MRAや下肢のMRAなどの血管像や整形領域など、非常に幅広い検査に対応できるようになっている。ぜひとも近い将来に導入を目指して行きたいと考えている。

大きな課題として一点残っている。それは画像の保管保存をどうするかである。現状ではRI、MRI、Angioでの検査データーは装置導入時から

全て残してあるが、その他CT、一般撮影、造影撮影検査のデータ及びフィルムは各診療科、総務課で保管されている。フィルムだけ見ても年間11～12万枚撮影されており保管スペースが問題となる。現状種々の法律により保管保存年数にばらつきがあるが概ね5年のようである。しかし色々な事由により年々保管年数が長くなっている

ようである。

放射線科の装置あるいは画像記録機器もX-TV装置（東芝）一台を残して全てデジタル化対応できるようになっており、この装置の更新を機に病院としての画像の保管、保存の在り方を検討していかなければならない状況にきている。

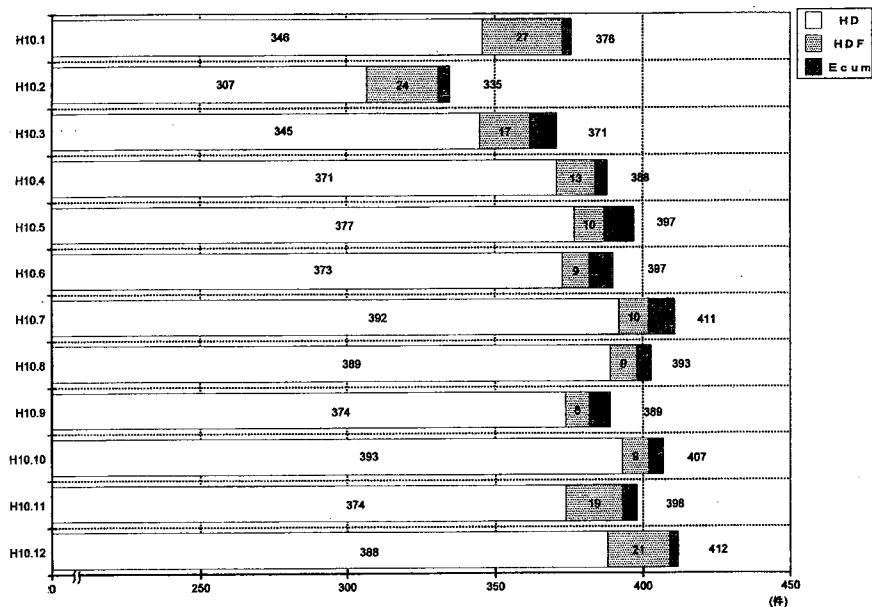
透析室の現状

臨床工学技士 平間 秀 昭

現在9床の透析室で血液透析療法等を行っているが、平成10年1月から12月までの全症例数を図に示す。1年間で4674件という数字は9床では驚異的な数字であり、1床あたりにすると正確なところは不明であるが、おそらく、道内ではトップクラスであろうと推測される。平成9年と比較して同時期で4114件と症例数自体は560件上

回っているが、その反面、血漿交換、腹水濾過等は10件から0件となった。

ベット数は変わらず9床で行っているため、現状はほぼ毎日2部透析を行い対処しているが、これ以上はどう対処しても頭打ちで、血液透析療法は行えないため、4月の増床を心待ちにしている。



平成10年の血液浄化症例数（総数：4674件）